資料③－2

2021 年 4 月 1 日

成長戦略会議　第 4 回スマート農林水産業ワーキンググループ

農林水産省への提案・要望

テラスマイル株式会社

1. 農業現場のデジタル化を進める際の現状課題（九州）

南九州では、10 年前の“農業 IT”の時代から、産地の主力品目を中心に、データを蓄積している農業経営者が多く、近年は蓄積したデータを活用してデジタル化に取り組みたいという相談を受けるようになっています。

ただし、データ分析を主業とする弊社から見ても、農業経営者が期待するデジタル化には、投資生産性が不確かな課目がまだまだ存在します。例えば“生育予測”や“収穫シミュレーション”などです。これらについては、「実装」としての事業よりも「研究実証」、「開発実証」により、リスク洗い出しを、事前に行うことが適切と考えます。しかし、産地では、農研機構との連携に対して、様々な壁が存在します。特にマッチングです。

① 農研機構との連携によるデジタル化の開発・実証を行いたいが、地域に対象品目に係る研究者がいない。地域産地品目であっても研究者がその地域にいるわけではない。

② 対象品目の研究者を探しても、研究分野が重ならない。もしくは研究分野が限定的になっているため、経営課題の解決にならず、農業経営者が投資を躊躇してしまう。

③ 研究分野が重なる研究者と出会えた場合でも、「協力検討」もしくは「開発実証」のスピード感が合わず、実証・実装のボトルネックとなるケースもある。

2. 課題による普及・展開への影響

ご存知のように、農作物は年 1 作であり、投資機会を逃すと、1 年間はアナログな状態で、社員に精神・体力負荷をかけながら大規模生産を行っていかなくてはなりません。マッチングには数年間待つことも優に考えられます。

南九州 3 県の農業法人・JA 産地は 100ha を超える西日本最大級のエリアもたくさんあります。ダイコン、ニンジン、サツマイモ、ホウレンソウ、茶などの国内主要品目です。彼らは既に 3－5％の輸出実績があり、農機や人材のシェアリング、データ分析にも積極的であり、農業の国内戦略・政策推進を考えても、デジタル化のイノベーターになって頂かなくてはなりません。マッチングとタイミングの壁を除くことが必要です。

3. 課題解決に向けた提案

以下の 2 つをご提案いたします。A)はマッチングの仕組み、B)は機会損失を防ぐプラットフォームの構築です。総務省がもつ“地域情報化アドバイザー”のような仕組みを農水省でも構築してはいかがでしょうか。弊社も得意分野で未来に貢献したく思います。

A)　産地からのオンライン協議が可能な、農研機構の研究員の情報データベース構築

B)　民間企業と農研機構との研究連携の仕組み構築（地域・分野専門家の委嘱）

以上